

セバステに於て殉教せる四十人の軍人に對する崇敬の歴史

水 川 溫 二

一、本論の主旨

建國の傳説や創業の歴史はそこに働いた幾人かの偉人英雄の名を傳へる。宗教の歴史ならば發祥時代の法難に犠牲となつた多くの殉教者の名を傳へる。然しそうして不朽の名を後世に傳へられてゐる人々のみが君國に殉じ聖業に献身した者の總てではない。名を貽した人々と同等の、場合によつては夫以上の功蹟を果した一層多數の人達が無名の儘空しく歴史の彼方に忘れられて行く。偉大な人必ずしも憶えられ、偉大ならざる者必ずしも忘れられるとは限らない。偉人英雄が後世から尊敬されるのは必ずしも其人自身の具備する偉大さによるのではない。極端に言へば人が尊敬されるのは其人が偉い爲ではなくて尊敬せねばならない理由が尊敬する側に在るからである。之は尊敬を受ける人が實は尊敬に値しないのだと言ふのでは勿論無い。然し尊敬されずとも、偉大なる者は偉大であり、聖なる者は聖である。換言すれば、偉大であると言ふ事と尊敬されると言ふ事とは同じでは無いのである。

或る人を尊敬する者は何等かの契機に於て、何等かの動機から尊敬といふ行爲をする。そして其契機を把へる者は尊敬する人自身であり、其動機は尊敬する人の屬する時代に在る。此點に我々が斯る尊敬が何故爲されたかを問ふ理由が在るのである。崇高な道德の實踐者や、不滅の眞理の唱道者は常に變らぬ敬慕讃仰を受けるであらうけれども、それとても、時により所により其の受け方、受ける程度に轉變の在る事は歴史の教へる所である。楠公は忠臣である。然し湊川神社の祭祀が特に徳川中期、元祿の頃から盛になり始めたのは何故であるか。英雄の代表者の様に言はれるナポレオンですら、祖國の人々から忘れられて其遺骸を絶海の孤島に横へる事二十年、ティエール内閣の時に俄かに迎へられて巴里のアンヴァリドに葬られたのは何故であつたか。或は近く、ジャヌ・ダルクが世界大戰直後、從來の福者ベアトの稱から昇格して聖人の稱號サンクを贈られ、全世界のカトリック教徒の崇敬を新にした事は、大戰中獨逸軍の侵略に脅えた佛蘭西國民の間に百年戰爭當時の祖國の救濟者たる彼女に對する追慕の念が高められた結果ではなかつたか。

斯く考へるならば、我々が或る偉大な傑出した人物に對して後世が捧げた崇敬の歴史を觀察する事は其崇敬の對象となる者の偉大さを知る事では無くて、崇敬を爲す者の思想や意圖や、或は其者の屬する時代を知る事でなければならぬ。本論は題してセバステに於る四十人の殉教者に對する崇敬の歴史と言ふ。崇敬が一つの行事として具現した場合、行事そのものの形式の變遷や、夫が行はれた地

域の異同の跡を辿る事も一つの歴史叙述であるかも知れないが、本論が右の題目の下に述べんとする所は崇敬の行事そのものでは無くて、寧ろ崇敬の行はれた時代に對する一般的考察を、崇敬の事實に關して傳へらるゝ記録を手懸りとして試みんとするものであり、且つ宗教的行事が一の歴史的觀察の對象となり得るのは如何なる點に於てであるかを明かにすると共に、結局、或る者に捧げられる崇敬と言ふ行爲も他の歴史的諸過程と共に人類の社會的創造的活動に參與する所に意義を持つものであり、斯る意義を持たざる崇敬の事實は歴史の上から忘れられなければならないと言ふ事を述べて見やうと思ふのである。

二、四十人殉教の事實と崇敬の起源

本論の主題を成す四十人の軍人が殉教したのは紀元三二〇年と傳へられる。當時羅馬帝國の東半を管領して居つた皇帝リキニウスが、西の皇帝コンスタンティヌスの隆々たる勢威を懼れ、基督教擁護策を採り來つたコンスタンティヌスに對抗する爲に、嘗ては自らもかのミラノの勅令に連署し基督教を宣言した身であるにも關らず俄かに態度を豹變し、羅馬の保守派の歡心を買ふ爲に羅馬の異教復興を圖り、領内の基督教徒迫害を始めたのである。此時ポントス Pontos 地方の小アルメニア縣 Armenia Minor (註1) の中心都市セバステ Sebastia に駐屯して居つた羅馬の第十二軍團 (註2) (所謂稻妻

軍團 Legio XII. Fulminata. 〔註一〕に屬する四十人の軍人は皇帝の命ずる偶像への禮拜を拒んだので、叛逆

者として、或る嚴寒の日凍結した池の上に裸體の儘放置され遂に凍死して殉教を遂げたと傳へられるのである。〔註三〕勿論之に就ては若干の挿話も加へられて居り、宗教傳説に見られる様な奇瑞異象も傳へら

れて居つて、其真相に就ては一應檢討を要する餘地が存しないでは無いが、本論の主旨から言へば、少くとも三二〇年頃セバステに於て四十名内外の軍人が殉教した事實だけを認めて議論を進めて差支へないと思ふ。

彼等に對する郷土の崇敬は、殉教の行はれた三二〇年から三三〇年不出ないと思はれる頃から既に盛んに行はれて居た事が、次の事實から證明し得る以上、この殉教の事實だけは疑なきものとして認められる。即ち、此殉教者に關する最も重要な史料の筆者であるカバドキア Cappadocia のニッサ Nyssa の司教グレゴリウス〔故に又グレゴリウス・ニッセヌス Gregorius Nyssenus と呼ばれる。〕は若き頃哲學に凝つて、基督教に對して冷淡になつた時、之を案じた敬虔な母親エメリア Emmelia は彼に命じて強ひて四十人の殉教者の追悼の式典に參列せしめた。不本意乍ら母の命に従つて祭式に與つたグレゴリウスが、夜が徹しての祭典に倦怠して堂外の庭に假寢して居る時、夢に四十人の殉教者が現れ、鞭を以て彼の不信仰を責めたと見て眼覺めた。そして此靈夢に感動した彼は一心發起して信仰の道に精進するに至つたと彼自身の傳へる所である。〔註四〕處でグレゴリウスの生年は三三五年〔一説三三二年〕と推定さ

〔註五〕
れてゐる。然らば彼の母は大體殉教者と同時代の人である。又彼が參列した祭式の行はれたのは、ポントス地方のアンネッシ Annesi (イリス河畔でアマシア Amaseia の近く) であつて、セバステから餘り離れて居らない。殉教談が全く架空な物語に過ぎないならば、斯も早く彼等四十人に對する郷土の崇敬が始められるとは考へられないのである。

抑、ポントス地方は基督教を受け容れた始めから殉教者崇敬の盛な土地であつた。ポントスには既に第二世紀の始めに相當根強く基督教の宣傳がなされて居つた事は一二年頃ビチニア Bithynia 及びポントスの知事であつた小ブリニウスが皇帝トラヤヌスに宛てた有名な書簡の中にも (Ep. N, 96) 此地方に於る基督教徒の數の意外に多い事を報告して居る所を見ても明かであるが、然し此頃の基督教は主として西部の海岸地方の都市に住む教養ある市民、即ち充分ヘレニズム化された地域の人々の間に盛んであつたと考へられるのであつて、奥地殊にポントス・ポレモニア Pontus Polemoniacus (即ちセバステを含む地域) への布教は甚だ困難であつた。何故ならば他の小亞細亞奥地一般がさうであつた如く、ポントスにも傳統の古い雜多な民間信仰が盛に行はれてゐて、基督教の様な高尚な教義と嚴格な規律を持つ外來宗教がその根を卸す事は甚だ困難であつたからである。メン Men の崇拜の如きは最も盛であり、恐らくはキベレ Kybele やアッティス Attis 等フリギア地方の信仰も入つて來てゐたであらうし、基督教の好敵手であつたミトラ Mithra の宗儀も信奉されたであらう。何れも猥雜な神

祕的な行事や儀式に富み、之によつて無智低級な地方民衆の信仰心を煽つて居つたのであるから、當時未だ禮拜形式の單純平調であつた基督教が之等の民間信仰に對抗して民衆の感興に訴へる所は甚だ少なかつたと言ふ事が出来る。従つて彼等の間に基督教信仰の種子を蒔き、彼等が従來の異宗教に對して有した關心を轉換させる爲には、先づ基督教も大衆の宗教的欲求を満足させる様な形式、例へば何等か賑やかな行事を具備しなければならない。

此點に着眼したのが第三世紀の中葉此地方の布教に當つた、『奇蹟を行ふ人』Thaumaturgusと渾名された聖グレゴリウス(勿論前述のニッサの聖グレゴリウスとは別人)であつて、基督教の殉教者に對する祭典を此地方在來の民間信仰の儀式に倣つて華やかに賑々しく執行する事によつて、民衆の嗜好に投ずる事に成功したのである。(註九)斯てポントス地方奥地に於ける基督教の宣布は俄然活潑となり、教

勢著しく發展を見た。教養低き地方民衆も父祖傳來の宗教から受け得たと同様の感覺的法悅に浸る事を得て、始めて基督教に親しむ事が出來たのである。さればポントスの基督教徒にとつて殉教者崇敬は彼等の宗教生活の最も樞要な内容を成すと言ふべく、又實に彼等は殉教者崇敬を通じてのみ信仰を保持し得たとさへ言ふ事が出来る。彼等が殉教者を祭る儀式は眞に業々しく又極めて熱心であつた。従つてセバステの四十軍人の如きポントス郷土の殉教者に對しては殊更盛んな行事の營まれた事は想像に難くない所である。祭典當日、禮拜堂に雲集する善男善女の喧騒の爲に司祭の説教すら中絶を餘

儀なくせしめられた事を、ニッサの聖グレゴリウス自らが體驗として傳へて居るのを見ても、熱狂する信徒の信心振りが察せられるではないか。彼等は殉教者の墓前に頷き、又墓碑に手を觸れ唇を觸れて聖者の功力に與らむ事を望んだのである。(註一〇)

之を要するに、殉教者崇敬はポントスの民心を基督教に歸依せしむる第一條件であり、且つ稍、語弊はあるが一の方便であつた事を認めて本論に入りたいと思ふ。

三、第一期(第四世紀)——地方教會の司牧策としての崇敬

セバステの四十人の殉教者の崇敬に關する最も古い記録と考へられるのは、カパドキア(Cappadocia)の大神學者として有名な聖バジリウスΒασίλειος及び其弟である前記グレゴリウス・ニッセヌスが夫、四十殉教者の頌徳の爲になした式辭及び他の機會になした一・二の説教であつて、前節にも述べた通りグレゴリウスは若き頃四十人の殉教者の祭典に母の勸告で參列して回心の機會を持つたといふ體驗の持主であり、此物語から察しても、彼の一家は早くから此殉教者達への崇敬心が極めて厚かつた事が認められる。従つて、彼等二人の兄弟が夫、司教の榮職に就いて地方教會の司牧に當る事になつた時、己達の崇敬する聖人達の徳を信者達の前に顯揚すべく努力した事は極めて當然の事であり、特に取り立て、其動機を追求するには及ばない様に考へられる。然し當時の此地方の教會が直面しつゝあつた問

題を考へる時、彼等司教職に在る兄弟神學者が唯尋常の儀禮として殉教者頌徳の式辭を述べたのであると解し去る事の出来ない事情を認めざるを得ないのである。

夫は、正統派の信仰を脅かす異端、殊に此地方の信徒の信仰生活の爲に最も肝要な殉教者崇敬そのものに反對する異説が起つて次第に有力となりつゝあつたと言ふ事實である。殉教者崇敬を否認する教説は言はゞ此地方の信徒を基督教全體から引離す危険思想である。正統派教會の司牧者としてのバジリウス及びグレゴリウスが己れの管區内の信者達を正統信仰に留まらせる爲には、斯る異端に對抗して特に殉教者崇敬を勧告する事の賢策であり、緊要事である事を見逃す筈は無いと思ふ。兩人共、其友グレゴリウス・ナジアズズ *Gregorius Naziansus* と共に『三人の偉大なカパドキア人』と併び稱せらるゝ程神學者として又司教として名望のあつた事は教會史家の整しく認める所である。その教區司牧上の政治家的明察が信仰上の重大問題に處して之を克服する爲に、民衆心理の機微に觸れて其感情に訴へる如才無さを有したとて怪しむには足りないであらう。

兄バジリウスは三七〇年から三七九年までカバドキアの中心都市ケーザレア *Caesarea* の司教であり、弟グレゴリウスの三七二年兄の按手を受けてニッサの司教に任せられて居る。然るに時宛かも熱心なアリウス派異端の支持者たるヴァレンス *Valens* が帝位に在り三七八年帝が殞落する迄、正統派は政府の手によつて大いに迫害を蒙つた。彼等二人も司牧上布教上様々の妨害を受け遂には逮捕監禁の

憂目すら見やうとした程で、之に對して二人が深き肉親愛を以て互に慰め互に扶けて忍苦した切々たる眞情はバジリウスの書簡にもまざくと物語られてゐる所である。(註一二)斯く正統派が迫害せられつゝあつたに乘じ、獨り皇帝の信仰をかち得てゐたアリウス派のみならず、他の雜多な異端異説が簇立し、ポントス地方ではセバステの町の司教エウスタティウスなる者が異説を唱へ、之が殉教者崇敬に對してその非を鳴し始めたのである。(註一三)

エウスタティウス Eustathius は既に三四二年頃に開かれたガングラ (Gangra) に於る司教會議で一旦其

説を非難されたので、一時自説を離して正統派教會へ復歸してゐたのであるが、正統派が迫害さるゝ

や再び元の異説に立戻つたものであつて、其教説の内容は大體ガングラの司教會議の決議文によつて

知られるのである。之によると彼の主張する所は現實生活の意義を餘りにも無視した嚴格な敬虔主義

であつて、例へば、結婚を罪惡視し(決議文第一及第九條)、親子相互の扶養を否認して居り(第十五及第十六條)、そして殉教

者崇敬の爲の集會や祭式を非難して居るのである(第二條)。斯る説は恐らく都市の敬虔な智識階級の間な

どには容認されたかも知れないし、地方の無智な民衆は反つて其是非の判断に迷つたであらう。ポン

トス地方の司教すら殉教者の追憶の式典に不熱心となつて來た事は、三七六年頃バジリウスが彼等に

宛てた書簡によつても推察されるが、之がエウスタティウスの感化によるものであると考へる事は強

ち無理では無いと思ふ。其書簡は、『殉教者への崇敬は主(基督)に希望を繋ぐ者の總てによつて熱心

に果されなければならぬ』と説き起し、カバドキア地方で古くから行はれてゐる殉教者エウブシキウス Euphychius 及びダマス Damascus の記念祭典にポントスの司教達の從來通りの参列を希望し、最後に『大いなる善き業が諸兄の前の民衆の間に在る。彼等民衆は諸兄に教化さるゝ事を望み、且つ殉教者に對して尊敬を捧げる事によつて報はれる功德を熱心に希求してゐる。されば我が懇願を容れ諸兄の多少の面倒を忍んで余に大いなる満足を賜はるの友情を示され度い。』と結んでゐる。此の懇ろなる言葉の中に、名司教と仰がれたバジリウスが己れの管轄下に在る教區内の司教と信者との間に殉教者崇敬を繞つて起りつゝあつた感情の疎隔と、夫によつて當然起るべき教會全體の重大な危機に對して抱きつゝあつた深き憂慮を讀み取る事が出来る。

ポントスの教區の中心はセバステである。この四十人殉教の聖蹟の地の司教であつたエウスタテウスが殉教者崇敬に反對を唱へた事は眞に皮肉な話であるが、兎に角問題は獨り信仰上の行事の問題のみではなくして正統派信仰そのものの興廢に繋り、又一世紀前に聖グレゴリウス・タウマトルゴスが困難と闘ひつゝ異教から基督教へ教化した大衆を再び教會から失ふ事となる。之を防ぐ爲にはバジリウスやグレゴリウスが率先して殉教者崇敬の範を示すべきであり、一層效果的で緊要な対策はエウスタテウスの任地セバステの郷土の殉教者、即ち四十人の殉教軍人の徳を讃へ彼等に對する祭典を盛にする事ではなければならない。殉教者崇敬反對者の牙城たるセバステのその土地に於て、その土地

の殉教者の祭祀を盛にする。而も名望ある司教が自ら之を勸めるのである。之が殉教者崇敬に反對する異端に對する最も適切な正攻法でなければならぬ。三八〇年バジリウスと前後してエウスタティウスが死んだ時、グレゴリウスは末弟ペトルス *Petrus* をエウスタティウスの後任としてセバステの司教に推して居る。特に學者でも無く寧ろ敬虔で質樸な一修道者を以て甘んじてゐたと言はれるペトルスを以てセバステの司牧者たらしめたグレゴリウスの意圖が奈邊に在つたかは説明を要しないと思ふ。(註一七)

以上第四世紀の後半に於る偉大な司教達によつて殉教者崇敬の勵行された事實を觀察した次第であるが、その勵行された動機から言つても、又恐らくは四十殉教軍人の崇敬の行はれた地域から考へても、問題は殆んどポントス地方の教會の司牧策に關するものに過ぎないと言ふ事、即ち地方教會の正統信仰擁護策の具現に過ぎなかつたと言ふ點を指摘して、次に述べる第二の時期に於る同じ崇敬の動機及び其目的とする範圍との比較に備へたいと思ふ。

四、第二期(第五世紀)——教會の中央集權策としての崇敬

バジリウス、グレゴリウス兄弟の説教に次いで、四十人の殉教者に對する崇敬の事實を物語るのは、第五世紀中葉に在世したソゾメヌス *Sozomenus* の教會史である。(註一八) その第九章第二節によれば、皇帝テオドシウス二世の姉で、女帝 (*Augusta*) としてテオドシウス二世の全生涯を通じて其後見役となり事

實上國政を親裁したブルケリア Putheria が夢にセバステの四十人の殉教者の靈示を受け、彼等の聖なる遺骨の埋没されて居た場所を知り、漸く遺骨を發掘して改めて盛大な儀式を執行して手厚く之を埋葬したと言ふ事である。そして著者ソゾメヌス自身その盛儀を實見したと述べてゐる。ソゾメヌスが此奇瑞を特に傳へたのは、全く皇姉ブルケリアの徳を頌へ、その敬虔な行爲を顯揚する以外他意なきものであらうけれども、前世紀の後半にはポントスに於ける地方的崇敬の對象に過ぎなかつたと考へられる四十人の殉教者が、此時に至つて如何にして宮廷内の尊崇を受ける様になつたか、如何にして女帝に夢見られるまでになつたかと言ふ經緯に就て一應檢討を加へてみる必要があると思ふ。

尤も殉教者崇敬の習慣は當時の教會全般通常の事で、互に遠隔の土地の教會が直接郷土とは關係の無い殉教者をも一定の祭目を設けて祭る風習が行はれてゐた事であるから、宮廷に於て國內邊鄙の土地の殉教者が如何に崇敬されやうとも強ち怪しむには足りない所ではあらうけれども、此場合にも——ポントス教會の場合の如く——帝都を中心とする教會の特殊な當時の情勢から推して觀察を進めるならば、矢張り其處に偶然ならざるものが見出されるのである。

第一に指摘されねばならぬ點は、當時帝都コンスタンティノブルの司教をして居つたのはアッティクス Atticus と言ふ人物であつて、此者の故郷は他ならぬセバステであつたと言ふ事實である。〔註一九〕彼が帝都の司教職に就いたのは四〇六年で、其後三年目、即ち四〇八年に皇帝アルカディウスが崩じ、そ

の繼嗣として帝位に即いたテオドシウス二世は齡未だ八歳に過ぎなかつたので、之もまだ十六歳の少女ではあつたが怜悧で信心深い姉ブルケリアが皇帝を輔佐して政を攝る事となつたのである。テオドシウス二世の治世となつてからも、アッティクスは帝都司教の重任に在る事更に十七年の久しきに及んで居る。従つて此長い年月の間帝都の司教として常時宮廷に出入し宮廷の信仰生活を指導したのであらう所のアッティクスによつて、性來信仰心の厚い皇姉ブルケリアが深い感化を受けたであらう事も想像されるのであつて、〔註二〇〕恐らく四十殉教軍人の話も直接セバステ出身のこの司教の口から傾聽したに相違ない。而も尙ほ之だけの事實から結論すれば、宮廷に於て四十殉教者への崇敬の行事が營まれた事は敬虔な皇女の一徳行を物語るに過ぎぬ話題として議論はこゝで盡きるかも知れない。

然し、セバステの人アッティクスが帝都の司教に選任された事情と、彼が帝都司教として全教會統治の上に示した司教の方針とを顧みるならば、問題は爾く單純には看過し得ない動機を秘めて居る様である。教會史家ソクラテス *Socrates* に依れば、アッティクスは好學で勤勉で且つ雄辯であり、信徒を教化し司牧する上に天賦の才智と手腕を持ち寛嚴その時を得て大いなる信望を博したと言はれ、そしてその若い頃は隱遁的な生活を送つてゐたと傳へられる。同じく教會史家ソゾメヌスに據ると、彼が郷里セバステに居つた頃はマケドニウス *Macedonius* 派異端〔註二一〕の修道僧として、かのエウスタティウスの教説を奉じてゐたが、長じて正統派教會に歸正したと言ふ甚だ注目すべき事實を傳へてゐる。前節に

述べた通りエウスタティウスの説く所は殉教者崇敬に對する反對を含んでゐた。その異説に傾いてゐたアッティクスが正統派に轉向した所にかのバジリウス等の努力の結果が物語られてゐると考へられるし、又アッティクスが恐らく殉教者崇敬に就て抱いた新しい信念も推察し得ると思ふ。扱、かうした經歷を持つた彼が如何にして帝都コンスタンティノープルの司教の要職に就く事となつたか。

三八一年のコンスタンティノープル教會全體會議の決議文(第三條)によつて名文化された如く、『コンスタンティノープルは「新しき羅馬」なるが故にコンスタンティノープルの司教は羅馬の司教に次ぐ尊嚴を有するものである』〔註二二〕と言ふ觀念は東方奠都以來早くから始まつた様である。其結果東方に於て夫、

神學的學統の古さを誇り、又民族的感情も手傳つて互に對峙して來たアレキサンドリアとアンティオキアの二大司教座は、此の新しき羅馬の司教職を自家の勢力圏内に收めて教權伸張を圖らん事に努め、既にテオドシウス一世の治世に於て帝都司教選任問題は兩派の激しき抗爭を惹起し、之が帝國全般の秩序を紊す事甚しかつたのである。斯る紛擾を防ぐ爲には相争ふ二大教權の何れにも屬せざる中立の立場に在る白紙の人物に帝都の司教權を委ねるより外に途はない。國教としての基督教の信仰統一に特に心を用ひたテオドシウス大帝が三八〇年未洗禮の一貴族に過ぎなかつた温厚篤實の士ネクタリウス Neclarus を拔擢して俄仕立の僧衣を纏はせて、帝都の司教に叙したのも全く斯る事情からなされた異例の處置であつた。〔註二三〕ネクタリウスの後繼者ヨハネス・クリゾストムス Johannes Chrysostomus は

アンテイオキア派の勢力に擁せられて就任したが、果して其職を全うするを得ず反對派に乗せられて宮廷との間が圓満を缺き遂に在任五年にして流謫の憂目を見、之に代つたのはネクタリウスの弟アルザキウス Arzacias で、就任の翌年病歿した。アルザキウスの後任に選ばれたのが即ちアッティクスなのである。

當時アッティクスは帝都の教會の職員であつて「ヨハネス・クリゾストムスの敵」(註二四)であつたと傳へら

れて居るけれども、之は彼がアレキサンドリア派に屬して、居つたとか或は特に反ヨハネス黨とも名付くべき一派の一員であつたと言ふのではなくて、寧ろ教權争ひに超然たる中立派か、強ひて言へば宮廷の對教會策を支持する立場に在つた事を意味すると考へられる。前にも述べた通り、アッティクスは郷里セバステで隱遁生活を送つてゐた事がある。小亞細亞の教會の中でも特にポントス地方の教會あたりはアレキサンドリアやアンテイオキアの如き大司教座の勢力範圍からは離れて居り、從來の教權争ひからは超越してゐたと言ふよりも寧ろ無視されてゐたかも知れない。加之アッティクス自身が何れかと言へば隱遁的な無慾な性格であり、司教就任後の態度も示す様に寛仁で平和的で寧ろ妥協性に富んでゐた人物である。斯く考へるならば彼の司教選任は黨派的策謀や政治的野心に基付くのではなくて、前のネクタリウスの場合と同様その穩健であり黨派的色彩の無い所を買はれた結果であると推斷する事が許されると思ふ。

然し一旦司教となつた後のアッティクスは決して無爲無策な事大主義者でも無ければ、無難な平和主義者でもなかつた。勿論彼は徒らに敵を作る事は避け寧ろ反対派や異端者に對しても先づ懇談的に和解と歸正を勧めたと傳へられるが、彼がなるべく味方を殖やす事に努力したのは彼自身に對する一般の好意と信望とを高めん爲ではなくて、實に帝都司教座の教權を積極的に確立せん爲に外ならなかつた。即ちアレキサンドリアやアンティオキアの如く廣大な地盤——その司教任命權を掌握して居る地域——を保有する既成大教權に對抗して帝都の司教が直接號令し直接其地の司教を叙任し得る如き教區を少しでも多く確保する爲である。斯る教區は當然既存する大教權の勢力範圍外に求められなければならぬ。小亞細亞の奧地やトラキア地方等は正に斯る類の地域であり、又帝都に隣接する地域には特に努力を拂つて、其地に住む信徒の心を帝都の教權へ歸服せしめねばならなかつたのである。アッティクスが『遠隔の地に在る貧民の事をも心配した』のも、又清濁併せ飲むの寛大さを以て極端な異端迫害を戒めたのも皆斯る意圖の現れである。(註二五)そしてアッティクスの死後、その後任選定に際しては最早アレキサンドリア派やアンティオキア派の抗争は行はれず、反つてアッティクスの下に在つた職員の間にも司教職が競はれ結局帝都郊外の小邑エレア *Elea* の教會の主任であつたシジニウス *Sisinus* が選ばれて居り、更に其後任問題が紛糾した際には反つて帝都の教會に對して白紙の人として『外來者 (*ἐπιγνώστῳ*)』である有名なネストリウス *Nestorius* がアンティオキアの教會から招かれて就任したと言ふ

事實から推して、アッティクスの帝都教權確立策は大いに效を奏したと言ふべく、四五一年カルケドンに於ける教會全體會議が特に決議して、『ポントス、アヅア(即ち Provincia Asia)、トラキアの各地方の司教はコンスタンティノープルの司教によつて叙任さるべき事。』との規定(第二十條)を設けたのは、帝都司教座の勢力範圍が確認された事を意味する。〔註二六〕

斯の如くアッティクスがあらゆる機會を把へあらゆる方便を以て帝都司教權の伸張に努めた事が認められるならば、ポントス地方出身者たるアッティクスがポントスの教區を中央の教權下に收める手段としてポントスの信徒にとつて最も重んぜられて居る宗教的行事たる殉教者崇敬に想到するであらう事は想像に難くないと思ふ。殊にポントスの郷土の殉教者たる四十人の軍人に對する祭祀に於て然りと考へられる。よつて彼はセバステの殉教者崇敬の爲の祭祀を帝都に於て盛ならしめんとし、自然其願望は彼が常に出入する宮廷の人々にも傳へられ、就中敬虔な皇姉ブルケリアの心を動かして、偶、彼女の夢見となつて其實行を見るに至つたと解する事が許されると思ふ。尤もブルケリアが四十人の殉教者の爲に盛儀を營んだのは、プロクルス Proclus (ネストリウスの二代目の後任)が帝都の司教に在任中の事で、従つて四三四年以後の事であるが、ブルケリアをして斯も深き殉教者崇敬の念を起さしめたのは、彼女が若き頃アッティクスから受けた感化であつた事は言ふ迄も無いと思ふ。

然し、此推論はブルケリアの此宗教的行爲が彼女自身の何等か政策的な俗的な意圖から爲されたも

のであると解すべき理由にはならない。唯彼女の意識するとせざるとに拘らず、彼女の殉教者崇敬と更に大きな歴史事實との間に認めざるを得ない一の明かな因果關係を指摘し、同じ四十殉教者の崇敬が地方教會の行事から宮廷の親祭の對象となるまでの過程に於て教會司牧者としてのアッティクスの演じた役割を強調したのである。而して第一の時期に於けるバジリウスやグレゴリウスが殉教者崇敬を媒介として意圖した所が信仰擁護に在り又問題は地方教區の問題であつたに對し、アッティクスの場合は教權擁護が目的であり中央集權的な教會統治が求められてゐたのである。即ち第一の時期は基督教が公認されて未だ程なき頃であり正統信仰の基礎も未だ確立せず教會全體を統一すべき行政的體制を樹立する邊が無かつたのであるが、第二の時期は少くとも大勢に於て正統信仰の勝利が確定し教義上の紛糾を一應解決し得べき規準を確立した教會が漸く部内の統制の爲教職制度の樹立に努力し得る餘裕を持つに至つた事を示してゐる。第一、第二の時期共、殉教者崇敬は他迄教會内部の利益の爲に營まれたのである。ブルケリアの行爲も宮廷の爲や國家の爲ではなくて單に彼女自身の信心の爲であり、少くとも一人の基督教徒として教會への奉仕として爲せる善業に過ぎなかつた。此點を特に注目して第三の時期の觀察へ進みたいと思ふ。

五、第三期(第六世紀)——帝國の國策としての崇敬

ブルケリアの事績を傳へたソゾメヌスの教會史以後約一世紀程の間、四十殉教者の崇敬に關する記録は再び途絶えてゐる。

然るに第六世紀の中頃、皇帝ユステイニアヌスの時代に至つて、當時の歴史家プロコピウス Procopius により、皇帝自身がセバステの四十殉教者の遺骨の不可思議な功力によつて大病から醫されたと言ふ興味ある物語が傳へられてゐるのである。〔註二七〕處でもう一つ全く同様の話がプロコピウスによつて語られてゐるが、夫はユステイニアヌスがコスマス Cosmas 及びダミアヌス Damianus と言ふ兄弟の殉教者の功力で醫者も見放してゐた重病から奇蹟的に救はれたと言ふ話である。〔註二八〕面白い事には同じコスマス、ダミアヌスの名で呼ばれる兄弟の殉教者は三組在つて、夫、羅馬、埃及、キリキア Cilicia に於て殉教した事になつて居るのであるが、ユステイニアヌスの病氣を醫したのはキリキアで殉教した兄弟でディオクレティアヌス帝の迫害の際に殺された事になつてゐる。生前醫者であつたと言ふ所から、嘗ての希臘のアスクレピオスの神と同様醫療の方ありと信せられ、第四世紀の末頃から帝都コンスタンティノブルを中心とする帝國各地に於て一般民衆の間に盛んに崇敬され、色々迷信的な祈禱や行事が行はれて居つた様であるから、大帝がこの二人の殉教者の力で病氣を醫された事は、言はゞ當時の一般の慣習に從つて大帝の側近者あたりが何等かの加持祈禱を試みたのであらうと考へらるゝ、以外特に穿鑿に値する深い動機は無い様に思はれる。之に反して四十人の殉教者に就ては左様な風習のあつた事も傳

はらないし、大帝が病氣全快の感謝の爲帝都に於て四十人に對する崇敬を盛にしたと言ふ事には他の一層深い念慮が働いてゐると認むべき理由がある。

其を述べるに先立つて比較の爲に先づ觀察しなければならぬのは、當時シリア地方に於て盛に崇敬せられ、矢張りユステイニアス大帝自らの勸請で其爲に帝都に禮拜堂が建立されたと傳へられる聖セルギウス *Sergius* の事である。〔註三〇〕大帝のみでなく、皇后テオドラもシリアのセルギオポリス *Sergopolis* (舊稱レザファ *Resapha*) に在るセルギウスの御堂に寶石を鏤めた十字架を奉獻したと傳へられ、宮廷の尊崇は甚だ厚かつた。然らば何故に此の殉教者は斯も崇敬されたのであらうか。

聖セルギウスは第四世紀初頭マキシミアヌス帝の迫害によつて前記レザファに於て殉教したシリア郷土の殉教者であり、セバステの四十人と同様に羅馬の軍人であつた。而してユステイニアス大帝の時代には東羅馬帝國と波斯との間には屢々戦争があり、五四〇年には波斯大王 *Chosroes* 一世による大規模なシリア侵入が行はれ同地方は大いに荒掠されたが、比時セルギオポリスは僅かな兵力によつて守られてゐたにも關らず、此町を圍んだ數十倍の波斯軍が突如攻撃を中止して撤退し、奇蹟的に東夷の侵略を免れる事が出来た。歴史家プロコピウスは此の敵軍の退陣の原因は水の缺乏によると言ふ極めて合理的な解釋を下したのであるが、第六世紀末の教會史家エヴァグリウス *Evagrius* は之は聖セルギウスが現はした異象が波斯軍を恐怖せしめたのであると傳へるのである。波斯戦争に従

軍した經驗すら持つプロコピウスの解説は至極妥當であり真相に近いとは考へられるけれども、同時にそれから約半世紀後の教會史家の録す所も全然意味の無い後世の訛傳としてのみ片附ける事は出来ないと思はれる。何故ならば、波斯軍が優勢な兵力を有するにも拘らず忽然として退陣したと言ふ事はセルギオポリスの一般民衆にとつては奇蹟としか理解出来ない謎であり、神業であつて、町の守護者たる聖セルギウスの加護の賜であると眞面目に信せられたと言ふ事は有り得べき事である。夷狄の侵入から郷土を護る神祕な力を殉教者の功德の中に渴仰したのであつて、斯る例はポントス地方に於ても殉教者テオドルス Theodorus (矢張り軍人であつた)等に就て擧げられる所である。〔註三一〕殊にセルギウスは軍人であつた。前にコスマスとダミアヌスが生前醫者であつた故に醫療の聖人として崇敬された事から推して、軍人であつた殉教者に國を護る方を望む事も肯定出来ると思ふ。そこで、ユステイニアヌス帝が何故聖セルギウスを尊崇したかに就て一つの解答が與へられなければならない。即ち、軍人である殉教者の崇敬を盛にする事は國境方面に於て常に外敵の脅威を受けつゝある同地方の民衆の士氣を鼓舞する事であり、宮廷が進んでその崇敬を後援し且つ率先して其範を示す事は國難の下に在つて動搖し易い人民の心をして帝權に對する信頼を失はしめない賢策であつて、言はゞ國難を克服して國策を維持する上の寧ろ適切な手段でもある。シリアの殉教者セルギウスに關するこの觀察をポントスの殉教者たる四十人に當嵌めて見ては如何であらうか。

セバステの四十人も矢張皆軍人であつた。又セバステの町はポントス地方の東南奥地に在り、ハリス Halys 河の上流地域でこの小亞細亞第一の大河とエウフラテス河の分水嶺に程遠からぬ海拔一二五〇米の高地に位して居つて、古來東西交通の要衝に當り嘗ての波斯大王の軍道も此地點を通じてゐたと考へられる軍事上、殊に羅馬帝國の東境防備の爲の最も重要な場所である。(註三二)

居た羅馬の第十二軍團レキオンはアウグストゥスの時代以來殆んど専らエウフラテス國境線守備の爲常駐して居つたもので、其本據はカバドキアのメリテネ Melitene であつたが、セバステも其軍事上の重要性から推して相當の兵力の常駐を見て居つたと考へられる。コンスタンティン大帝による兵制改革の結果

山緒ある第十二軍團は一應解散されたが、新しき編成の下に國境守備は益々堅くせられて居り、ユスティニアス大帝の時代にはセバステを含む此方面の重要都市に新たに城壁が築造されて居る。

實際 ユスティニアス時代のポントス方面はシリア地方と同様波斯軍の侵入に脅かされて居るのみでなく、波斯と結び易いアルメニアの背叛に備へねばならず(殊にセバステを中心とする小アルメニアの住民は民族的に大アルメニアに復歸する可能性を多分に持つてゐる)、五四八年には黒海岸のポントス地方と隣接するコルキス Colchis 地方(即ちカウカス地方の)ラヂス Tarsus 族の住居する地域(Tarica)へ波斯軍が侵入しペトラ Petra(今日の Batum 附近)を陥れ大いに羅馬軍を惱ました事實あり。(註三四)

此ポントス地方の住民の士氣を鼓舞し、人心の不安を何等かの方法を以て除く事が急務である。而も

當時國家の財政は漸く窘迫を示して居り、プロコピオスが稍、惡意を以て傳へて居る所に據つても窺はれる通り、(註三五)國庫收入の増大を圖る爲の種々の陋策すら講せられ、地方民衆の不滿の聲は次第に高まり

つゝあつた際である。殊に最も肝要な軍隊に對する中央からの給養すら満足ならず、地方の自發的後

援に期待せねばならなかつた實情から考へるならば、ユステイニアス時代の帝國が如何に重大な非

常時に直面して居つたかを知る事が出来る。この國務多忙な且つ國用の増大しつゝあつた時に何故大

帝が敢て教會堂を建立し殉教者崇敬の行事を盛大ならしめたか。尤もユステイニアスは信仰の厚い

君主であつたと傳へられ、自ら好んで *basileus* の側稱を用ひた相であるが、彼はそれ以上に政治家であり

經世家である。單に己れの宗教心を満足させたり國民の信仰を高める爲に時や費用を割いたとは考へ

られ無い。(註三七)寧ろ此較的經費を要しない且つ容易な宗教的ジュエチユアによつて君主の名聲を大ならし

め人心を收攬する事によつて國內の分裂を防ぎ、以て國難を克服せんとする所に眞の目的が在つたと

推斷する事は餘りに穿ち過ぎた臆測であらうか。汎んや雜多な異民族を包含する帝國の中最も國境に

近く、外敵の脅威に直接曝されつゝあつたシリア及びポントスの民心を歸服させる爲に、同地方に於

て厚き尊崇を受けつゝある郷士の殉教者殊に軍人なりし聖人への崇敬を宮廷自ら行ふ事の效用は言は

ずして明かである。

之を既に述べた第一の時期に於る正統信仰擁護策、第二の時期に於ける教權擁護策としての殉教者

崇敬と比較して、同じ論法を以て表現するならば、ユスティニアヌスによる殉教者崇敬は國權及び帝權擁護策であつて、茲に至つて問題は全く教會から離れて、政治問題となり國策の具現となるのである。前代に於て皇婦ブルケリアによつて殉教者崇敬が宮廷の手で營まれたのは言はず、教會が之を動かしたのであり、信仰生活の指導者は教會であつた。即ち教會存立の爲の努力が間接にもせよ宮廷に働きかけたのである。然るにユスティニアヌス帝の行爲は帝自身の自由な意圖に發するものであり、宗教的である事を装ひつゝ、實は國家存立の爲の努力を宗教の上に働きかけたのである。茲に我々は大帝が一見些事と見られる宗教上の一行事も驅つて國策遂行の具となした綿密周到な深謀を見ると共に、大帝によつて完成されたと言はれるビザンツ的皇帝教主政治の本質とその由來を明かにし得ると思ふ。宗教的行事がさうであつたと同様に、教會の教職制度も國家の統制の下に服し、司教も司祭も總て一官僚として帝權に隸屬するに至つたのである。

六、結 尾

ユスティニアヌスの時代以後に於て四十人の殉教者の崇敬に就て特に傳へられる事件は無い様である。既に我々は略、一世紀づつを隔て、相異なる三つの時期に現はれた崇敬の事實を夫、その同時代の記録に基付いて觀察したのであるが、夫、の時期の中間の期間に於ても勿論殉教者に對する祭祀は絶ゆる

事無く續けられて居た事は言ふ迄もない所である。唯さうした中間の時期に於て慣習的に行はれた祭祀は特に記録さるべき歴史的意義を持たなかつたが故に後世に傳へられないだけの事である。同様にユステイニアス大帝以後の記録が四十人に對する崇敬を特に傳へないからとて其崇敬が廢絶した事にはならないのであつて、第九世紀中頃フランク族出身の司教アドアルド（註三九）の著はした殉教者曆 *Martyrologium* には三月十一日が四十人の祭日として加へられてあり、又今日に至る迄毎年三月十日全世界の羅馬カトリック教會に於て四十人の名に於てミサ聖祭が執行されつゝある事は之を證明するものである。千數百年間連綿として絶えざる此殉教者への崇敬が時に歴史家の筆に上り或は棄てゝ顧みられなかつたのは、その時代の欲求が崇敬と言ふ行爲の中に何等か満足すべき好都合な條件を見出したか否かによつて定まる。

四十人の殉教者の崇敬は彼等がポントス地方郷土の殉教者であると言ふ點に於てバシリウス等のポントス教會司牧策及びアッティクスの教權伸張策に役立つたのであり、更に彼等が軍人であつたと言ふ事がユステイニアスの人心鼓舞の目的に適つたのである。従つて特にポントスに對する時代的關心や、國防の急が少くとも其地方に於て失はれた時崇敬熱は自ら衰へて行く。或は歴史的事象として扱はれる意義が失はれるのである。現在世界のカトリック教徒の中三月十日に祭られる聖人達が如何なる人達であつたか、又ポントスとは、セバステとは如何なる土地であるかを知る人は比較的少いと思ふ。

然し斯る事を知らずとも殉教者崇敬の精神は全うせられて居り、宗教的行爲としての目的は果されてゐるのである。何故ならば、教會が殉教者を崇敬する眞意は、殉教者その人の性格なり經歷なりを敬慕する事ではなくて、殉教者に於て己れの榮光を顯はした神そのものに對する讚美の爲であるからである。言はゞ殉教者は神の存在の「證明者」(confessor)であり人の神に對する歸依信賴の「執奏者」(intercessor)に過ぎない。殉教者その者に神の如き偉力を期待し、奇蹟の原因を歸する事は冒瀆に外ならないと言はれる。教會が嚴重に「禮拜」(atria)と「崇敬」(dulia)とを區別し、前者を神のみに後者を天使及び聖人に捧げしむる理由も此點に在るのである。〔註四〇〕本論を通じて終始殆んど殉教者崇敬の一語を用ひ、崇拜・禮拜等の語を避けて見たのも此結論を述べん爲であつたのであるが、然し本論に於ては崇敬といふ用語すら尙ほ屢々不適當であつたかも知れない。何故ならば眞の崇敬は其對象となる殉教者なり聖人なりの人間としての性質に關はるもので無いからであつて、其出身地が何處なりや生前の職業は何なりしやに因つて成される尊崇は茲に言ふ意味の眞の崇敬とは呼び難いからである。

然し、斯る純粹な崇敬は絶對無邊なる神と共に遠く歴史の外にある。移り行く浮世を忘れて山間に行ひ澄ます修道士の勤行の様なるものである。斯る崇敬が何百年繰返された所で我々が夫を通じて各々の時代の歴史を知る手懸りとはならないであらう。本論がユスティニアヌス大帝時代に至る迄の約三百年間に於ける殉教者崇敬を通じて一聯の歴史的考察を試みる事が出來たのも言はゞ其崇敬が純粹な

敬虔の行爲としてのみ理解する事が出来なかつた結果である。之を要するに、一の歴史的事實として扱へられる殉教者崇敬の業なり行事なりは、兎も角も歴史的存在として現實に生き現實に死んだ人間としての殉教者其者を對象として成立するので無ければならない。少くとも其殉教者が個性として備へた何等かの特性に於て尊崇されて居るのでなければならぬ。さうでないならば、或る特定の殉教者なり聖人が特に或る時代の崇敬を受ける譯が無い筈である。従つて又如何に偉大な徳性を持ち、偉大な行動を示した者と雖、其者が其時代の關心を喚起する足る特性を備へるのでなければ崇敬の對象となり得ないのは當然であつて、斯る殉教者は歴史の上から忘れられて教會曆の上にのみ名を留めるに過ぎないであらう。故に或る殉教者の崇敬が盛になつた事實を認めた場合、その殉教者の如何なる點が其時代の關心を惹いたかを觀察する事によつて、時代的欲求なり時代的傾向なりを知り、以つて其事實に關する智識を歴史的に價値あらしめる事が出来るであらう。そして之は獨り殉教者崇敬に限らず、民族的に國家的に或は社會的に尊敬される偉人英雄に對する尊敬に就ても同様に考へる事が出来ると思ふ。本論は言はゞ殉教者崇敬を例にとつたその不完全な試論に過ぎないのである。(未完)

註引用書略號。——①DCB = Dictionary of Christian Biography, ed. by Smith and Wace, 1880. ②Harnack = A. von Harnack: Mission und Ausbreitung des Christentums, 1906. ③Lucius = Ernst Lucius: Die Anfänge des Heiligenkults in der christlichen Kirche, 1904. ④NPN = Nicene and Post Nicene Fathers' Library, Second Series, 1891-1900. ⑤尚且 Sozomenus, Sozomenusは何れも、その教會史を意味しNPN収録の英譯に據る。Sruho及びProcopiusはIoshb版に據る。

- 一、 Socrates, Sozomenus 共、『アルメニアのセバステ』と録してゐる。之は勿論小アルメニアの意であつて政治區劃の上で Pontus の diocesis に屬する様になつたのは三八七年アルメニアが羅馬と波斯とに分割した以後である。殉教の行はれた當時は Cappadocia の Provincia に屬してゐたと考へられる。(Alommsen: The Provinces of the Roman Empire, vol. I, p. 324, note.) 皇帝ハステニオヌスが新に小アルメニアの provincia (Armenia secunda) とした時にセバステは其の首府となつた。
- 二、 此軍團は基督教と縁故が深く多くの殉教者を出してゐる。(Harnack, II, SS. 43: 166 f. 等) Cornelle の劇 “Polyeucte” の主人公も其一人。(Harnack, II, S. 48)
- 三、 NPN, VIII, p. lxx f. DCB, II, p. 556 f. “Forty Martyrs” の項、等。
- 四、 NPN, V, p. 3. DCB, II, p. 762.
- 五、 NPN, V, p. f. 四三三三。 DCB, II, p. 762. 四三三三。
- 六、 プリニウスの頃のビチニアとポントスは一つの provincia であつて、廣義のポントス地方の西部の小地域を含むに過ぎず、殘るポントス全部はカパドキアの province に屬してゐた。
- 七、 Strabo: Geographica, XII, 3, 31. フリギア地方からの宗教の傳入も語られて居る。更に 38. 参照。尚ほ XII, 3, 31. にホンハイッスによつて興された Gabera の町が Sebaste と呼ばれたとあるが、勿論本論のセバステとは別である。
- 八、 Cunont: The Mysteries of Mithra, p. 42. はカパドキアやポントスから徵募された兵士が軍隊の移動に従ひ、ミトラの密儀の傳播に貢獻した事を指摘してゐる。尚ほ Cunont: Die orientalischen Religion im römischen Heidentum, S. 131 参照。
- 九、 Harnack, II, 174 ff. Lucius, 73.
- 一〇、 Lucius, 287: 310.
- 一一、 パツリウスはカパドキアの首府ケーザレアの司教として全カパドキアの教區を司牧した。グレゴリウスは三八一年七月三十日コンスタンティノープルの教會全體會議終了前にテオドシウス大帝の勅令によりポントス教區總裁を命ぜられて居る。

Socrates, V, 8. Sozomenus, VII, 9. DCB, II, p. 765.

セバステに於て殉教せる四十人の軍人に對する崇敬の歴史

第二十三卷 第一號

七三

一二、書簡第二百二十五。NPN, VIII, 267.

一三、Socrates, Sozomenus 等はエウスタタティウスの異端の内容は述べてゐない。彼の殉教者崇敬反對は次に述べるガンガラ會議の決議のみの様である。Lucius, 327 f.

一四、ガンガラ會議の正確な年代は不明である。従つてエウスタタティウスの活動の時期も甚だ曖昧である。NPN, XIV, 89.

一五、NPN, XIV, 92 f. に収録されてゐる。

一六、書簡第二百五十二。NPN, VIII, 292.

一七、パトルスはグレゴリウスよりも早く死んだ様であつて、其後グレゴリウスは自らセバステを訪れて弟及び殉教者追憶の祭典を行つて居る。(書簡第十八。NPN, V, 545.)

一八、此事實はSocratesにもTheodoretusにも傳へられず、Sozomenus 獨特の記録である。

一九、Socrates, VI, 20. Sozomenus, VIII, 27. 後者の方が本論にとつて注目すべき記述を含んでゐる。

二〇、Gennadius: De vitis illustribus, LIII. (NPN, III, p. 394) に據れば、アッティクスは皇女達に『信仰と貞潔に就て』と言ふ著書を捧げてゐる。

二二、此異端は聖靈の神格に就ての論議に於て正統派から離れたもので、三六〇年に罷免されたコンスタンティノーブル司教マケドニウスの思想に始まる。エウスタタティウスの異端とは直接の關係は無い。皇姉アルケリアの發掘した四十人の殉教者の遺骨は以前に一人のマケドニウス派の婦人が持つてゐたのであると傳へられてゐるのは此場合面白いと思はれる。Sozomenus, IX, 2.

二二、NPN, XIV, p. 178. 尚ほSocrates, V, 8. 参照。

二三、Sozomenus, VII, 8. に據れば、『この指名は大いなる驚きを惹起し、總ての人はネクタリウスとは何者ぞや、如何なる生活なせる人が、その出身地は何れぞやを確める事に努めた。彼が未だ洗禮を受けざる事(that he had not been initiated)が知らるゝや、皇帝の決斷に對する人々の驚愕は増大した。』と言はれる。ネクタリウスはキリキアのタルルス Taurus の人

である。

二四、Sozomenus, VIII, 27.

二五、Socrates, VII, 3: 25.

二六、小亞細亞及びトラキア方面への帝部教權伸張の概況は、Karl Müller; Kirchengeschichte, Bd. I, Iter. Halb. S. 597 ff. 尙

ほカルケドン會議決議文は NPN, XIV, p. 287. に據る。

二七、Procopius: De Aedificiis, I, 7. Lucius, S. 186.

二八、Ibid. I, 6. Lucius, SS. 186; 257.

二九、此二人の殉教者を磨衛の聖者として崇めた事は Lucius, 256 ff. に詳しい。

三〇、聖セルギウスに就ては Lucius, S. 233 ff. 参照。

三一、戦勝を齎す者としての殉教者崇敬の例は、矢張り Lucius, S. 199 ff. (Kap. V. Die kriegserischen Märtyrer.) の中に詳述されてゐる。

三二、之に就て考ふべき事は、セバステの名が Plinius (H. N. vi, 8.) に見えて、Strabo に見えない事である。Strabo (XII, 3, 2.) に據れば、ハリス河の上流はカミセネ Camisene 地方で、此地方の地名として特に擧げられてゐるのはカミサ Camisa と言ふ既に廢墟となつた古城塞だけである。(XII, 3, 37.) して見るとセバステは恐らくストラボの時代から大プリニウスの時代までの約半世紀間(皇帝ティベリウスの頃)に右のカミサの邊りに昔年らの要害地に始めから軍事的目的を以て建設された城塞であつたと考へられる。註七に述べた矢張りセバステと呼ばれた Cabena や、猶太のヘロデ大王によつてセバステと命名されたサマリア Samaria (Flavius Josephus: Antiq. Jud. XIV, 8, 5.) 等の建設の事情及びセバステの字義(拉典語の Augusta に當る)をも考慮すべきであらう。尙ほ此町は一四〇〇年帖木兒が此地方に侵入した際頑強に抵抗したが、陥落後住民たる四千人のアルメニア男子は生理めにされたといふ歴史がある。

三三、註二所掲の Harnack. 参照。此軍團は始め Syria の Raphanacae に置かれてゐたが、皇帝ネロの時アルメニア方面の事態急

セバステに於て殉教せる四十人の軍人に對する崇敬の歴史

第二十三卷 第一號

七五

迫した爲カバドキアへ移動し、爾來概れ此方面に常置された。(Parker: The Roman Legions, 1928, pp. 128, 134 ff, 148, etc.)

三四、Procopius, Anecdota, II, 26 f. 尙ほ同書(NXX, 14)に於てProcopiusは羅馬が波斯人にLazica(即ちラチス族の地域)を奪はれたのは、羅馬の間隙戰の失敗によると見てゐるのは面白い。

三五、特にAnecdota, XXV, 等によつて知られる。

三六、財産所有者は納税額に應じて軍隊給養の義務を負はされ強制的徵發が行はれた(Anecdota, XXIII, II-14)。又國境警備の爲の兵(Himikataと呼ばれる)はユステイニアス帝の初世にも不規則な不十分な待遇を受け俸給支拂も四五年延滞する状態であつたが、後にはそれすらも無くなり、正規兵の名前を取上げられた爲、國境は無防禦となり兵士は俄かに慈善家の手に縋らなければならなくなつた(Ibid., XXIV, 12-14)。又宮廷護衛の兵(特にScholarii)は高給を受けてゐたが、其爲賄賂を以て此兵籍に加はる者が多く、その爲ユステイニアス帝の治世にユステイニアスは自身に收賄して大いに此兵數を増加したが、自分が帝位に即いた時増加した兵士(Supernumerarii)を急に解備して所定の手當を全然與へなかつた(NXV, 15-20)。尙ほ右の近衛兵(Scholarii)に關する記述の中にZeno帝(474-491)の時まで近衛兵はアルメニア人のみから採用されてゐたとある事は注目に値する。

三七、ユステイニアススの宗教政策殊に正統派とモノフィット派異端(基督單性論派 Monophysites)との抗爭に對處する手段として殉教者崇敬が考慮されたであらう事も推察される。殊にアルメニア人の間にはモノフィット派が優勢であり、やがてアルメニア教會の民族的獨立の形勢が顯著となりつゝ、あつた時に於てポントス地方のアルメニア系住民の中央に對する歸屬を固める手段として宗教的行事を盛にしたと言ふ事も認め得る所と思ふ。(K. Müller: KG, Bd. I, SS. 739 f, 778; Frank-Bihlmeier: KG, (1931), Bd. I, SS. 154, 207.) 然し夫も大帝の國防上の方策の具現たる事に違ひはない。尙ほ五三六年皇后テオドラの推舉で帝都の司教に就任したアンティムス Antimus は帝都へ来るまでポントス海岸のトラペズス Trapezus の司教をして居つた人で、モノフィット派に屬して居り、五三七年正統派の爲にその職を逐はれた。

三八、費用を要しない許りでなく教會堂建立や祭典執行を名義として財産家に出費せしめ、或は一般信徒の献金を徴集する事を得たであらう。帝が極めて打算的であり、黄金を攫む爲には偽贖者であつて、神も司祭も法律も人民も顧みなかつた』事はプロコピウスがその實例を傳へる所である。(Anecdota, XXVII.)

三九、DCB, II, p. 556. "Early Martyrs" の項。

四〇、此點に就ては、Karl Adam: Das Wesen des Katholizismus, 6te Aufl. 1931. (邦譯吉滿義彦氏譯『カトリシズムの本質』改訂版、岩波) から次の一節を引用する。(一五三頁)『ボリカルプスの殉教物語は最初の原始基督教の殉教者崇敬を證するものであるが、聖者崇敬の雄辯なる辯護者アウグスチヌスとヒエロニムスを經て、何人にも優つてカトリックの聖者崇敬の本質を明快に規定した聖トーマスに至る、彼等教會の神學者達は力をこめて、我々が天使や聖者に對して向ける崇敬は、神への禮拜と本質的に (specifice) 區別される可き事を強調した。此の差別は即ち創造者と所造との差に外ならない。神のみが獨り全人的なる完全歸依に値し、禮拜的崇拜即ち神の神祕の前に戰慄する、かの禮拜とかの祈り (cultus Iatriae) に値するものである。獨り神にのみ我々々々「主よ我等を憐み給へ」と叫ぶ。』